

第1章 常三島遺跡地域創生・国際センター新営に伴う 試掘調査

第1節 地理的・歴史的環境と既往の調査

常三島遺跡周辺の地理的・歴史的環境と既往の調査については、既刊の報告書等（定森編 2005、北條・定森編 2006、端野 2015 など）で詳述されているため、ここでは概要を記すこととする。

本遺跡は、徳島市南常三島町に所在し、四国東半部を紀伊水道に向けて東流する吉野川河口付近のデルタ地帯に位置する（第1図）。本遺跡の南西に隣接する城山は塩基性片岩で形成され、その麓には縄文時代の海蝕痕と、鳥居龍蔵が調査を行った縄文時代後・晩期の城山貝塚が存在する。奈良時代には、吉野川河口付近に阿波国の条里が存在したことが文献記録にみられるが、今のところこれらは発掘調査で確認されていない。

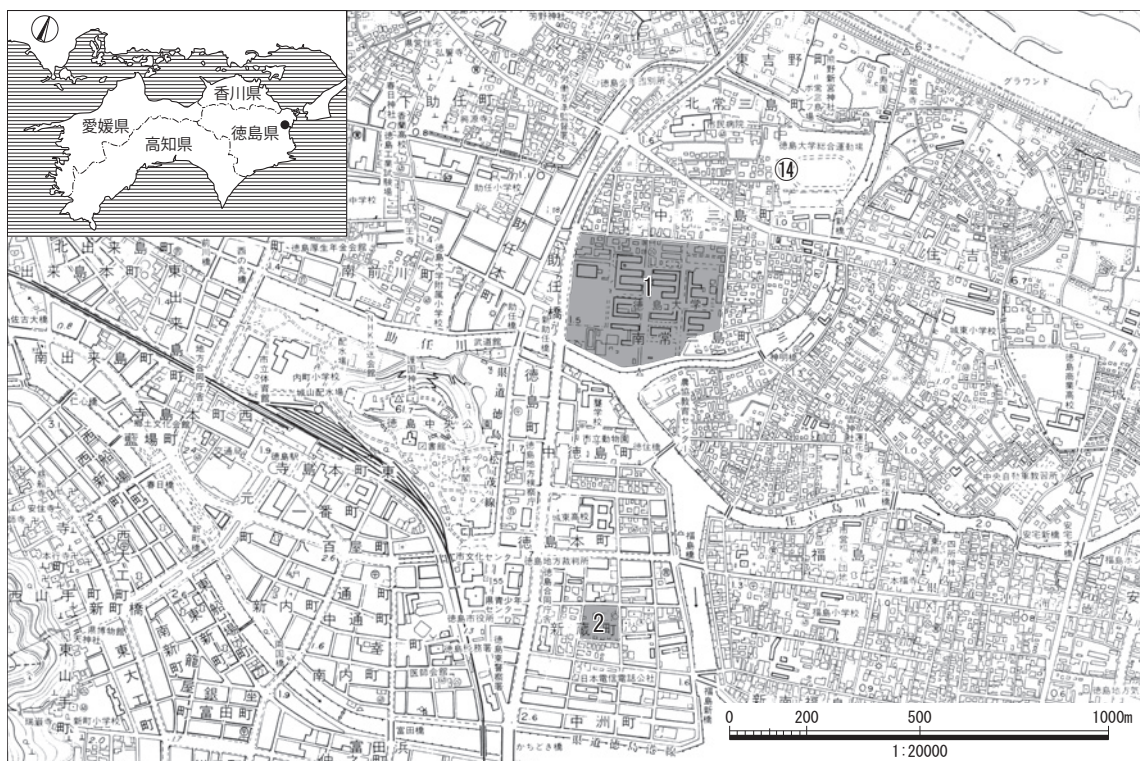
豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家政が阿波国に入部した。これ以降、中州の埋め立てなどによって、現在の徳島城を中心とした城下町建設が開始される。絵図や文献史料から、本遺跡は中・下級武士の屋敷地であることがわかる。また、本遺跡南東部の本学工学部付近には17世紀前半から中頃にかけて、徳島藩の初期船置所「安宅島」が存在したと推定される。本調査室はこれまで20次にわたる発掘調査を実施し（第2図）、上記の絵図・文献史料による記録を実証する成果をあげている（定森編 2005、北條・定森編 2006、端野 2015 など）。なお、本試掘調査は、常三島遺跡としては第21次調査にあたる。

明治時代になると、この地一帯は、江戸時代の街路区画が残されたまま急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校附属小学校が設置された。大正時代には徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置されることとなる。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから徳島大学常三島キャンパスが設置され今日に至っている。

第2節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

常三島キャンパスの南西に地域創生・国際センター（現・地域創生・国際交流会館）の新営が計画された。安政年間（1854～1860年）における徳島城下町の武家屋敷地を示した『御山下島分絵図』（個人蔵、平井・根津編 2001）と現在の地図を重ね合わせると、建設予定地は「常三島」地区とその南側に流れる助任川の境界付近に位置することがわかる。今回は、居住区の南端およびこれに関連する遺構が検出される可能性があったため、試掘調査を実施した。



1. 常三島遺跡（常三島キャンパス） 2. 新蔵遺跡（新蔵キャンパス）
 ⑭. 常三島遺跡第14次調査（総合グラウンド管理舎・器具庫の配水管改修）地点
 [国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成]

第1図 常三島遺跡と周辺の遺跡（端野 2015 より引用・改変）

2. 調査体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査担当 端野晋平・三阪一徳（埋蔵文化財調査室・助教）

調査補助 古川裕美（施設マネジメント部・技術補佐員（当時））

調査期間 2014年5月28日～6月2日

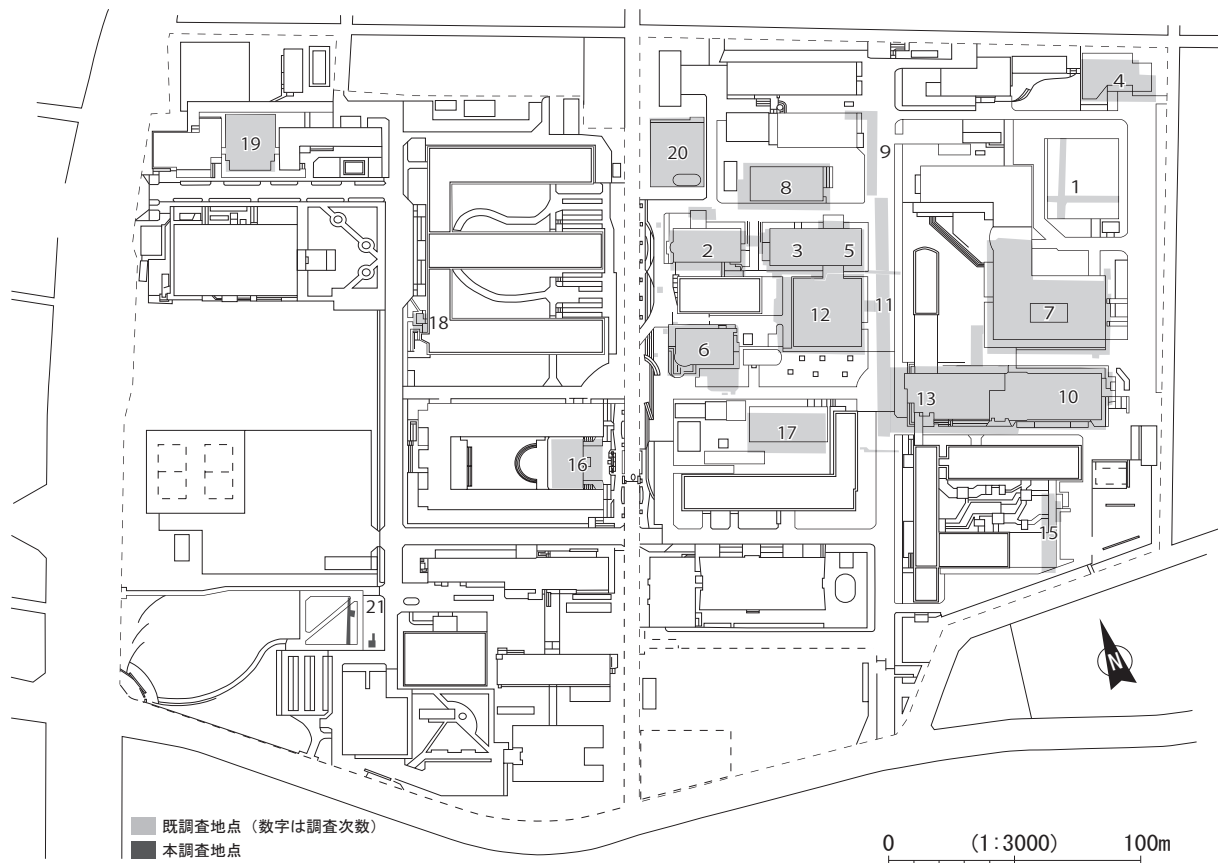
調査地点所在地 徳島県徳島市南常三島町1丁目1

調査面積 約40 m²

3. 調査の経過

地域創生・国際センター建設予定地における遺跡の広がりを確認するため、建設範囲に南北20 m、東西2 mのトレンチを東西2か所設定し、試掘調査を実施することとした。なお、東側をA区、西側をB区とした（第3図）。

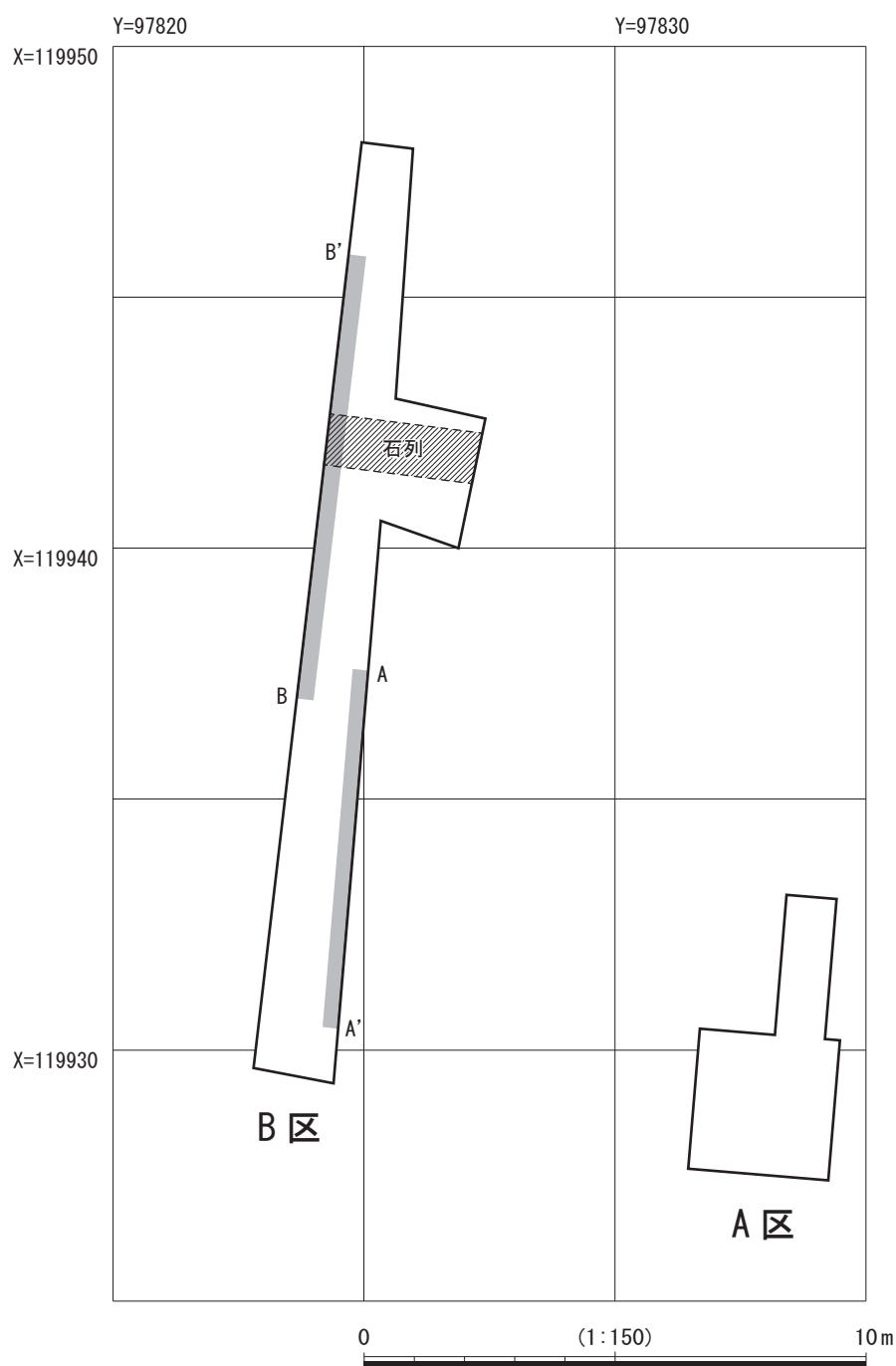
2014年5月28日に調査を開始した。まず、A区の南側から重機による掘削を行ったが、現在使用



- | | | |
|------------------------------|---|----------------------|
| 1. 工学部実習棟新営 | 9. 共同溝設置 | 17. 工学部総合研究棟改修 |
| 2. 地域共同研究センター新営 | 10. 工学部共通講義棟新営(共通講義棟Ⅰ期)、
共同溝設置(Ⅱ-4区) | 18. 総合科学部1号館エレベーター設置 |
| 3. 工学部光応用工学科棟新営 | 11. 共同溝設置(Ⅱ-1・2区) | 19. 地域連携プラザ新営 |
| 4. 工業会館新営 | 12. 工学部総合研究実験棟新営 | 20. フロンティア研究センター新営 |
| 5. 工学部光応用工学科棟新営(追加) | 13. 工学部総合教育研究棟新営(共通講義棟Ⅱ期) | 21. 地域創生・国際交流センター新営 |
| 6. サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営 | 15. 工学部実験研究棟(電気電子棟)改修 | * 番号は調査回数も兼ねる。 |
| 7. 工学部機械工学科棟新営 | 16. 総合科学部3号館改修 | |
| 8. 総合情報処理センター新営 | | |

第2図 既往調査地点と本調査地点の位置

されている配管が多数埋設されており、これらが北側にも延びることが判明したため、本区の調査を終了した(写真1-1)。つぎに、B区の南側から重機による掘削を開始した。翌29日も引き続きB区南半を地表から2m程度掘削したところ、砂層の堆積が確認されたが、明確な遺構は検出されなかった。また、砂層が厚く堆積し、壁面の崩落が危惧されたため、B区南半に土留の矢板を設置することとした。30日は矢板の打ち込みが終了し、B区北半の掘削を行ったところ、盛土状の土層の堆積が確認された。また、標高0m付近で、東西方向の石列が検出されたため、石列部分の東側を南北3m、東西2mにわたり拡張し、石列が東西方向にのびることを確認した。6月2日は試掘トレンチの掘削を完了した。続いて、B区の東壁・西壁の精査および土層断面の実測を行った。西壁の土層断面を記録することとしたが、南半については壁面の崩落が著しく危険が伴ったため、東壁を記録することとした。同日、調査区およびその周辺の座標を測量し、調査を終了した。



第3図 調査地点平面図と土層断面の位置

4. 調査地点の区割り

建設予定範囲に南北 20 m・東西 2 m のトレンチを東西 2 か所に設定し、東側を A 区、西側を B 区とした。ただし、配管の埋設状況や土層の堆積状況により、実際には A 区は南北 5.6 m・東西 1.0 ～ 2.8 m、B 区は南北 18.6 m・東西 1.0 ～ 3.1 m の範囲を調査した（第 3 図）。



1 A区（南西から）



2 B区（南から）

写真1 調査風景

5. 調査の概要

本調査室がこれまでに実施した発掘調査の成果や近世の絵図・文献史料から、現在の常三島キャンパス一帯には、近世の武家屋敷地が存在したことが明らかにされている。今回の調査では、城下町建設に伴うと考えられる盛土が確認され、これが近世「常三島」地区の南限を示している可能性が高いことがわかった。

第3節 調査成果

1. 層序

B区東壁A-A'・西壁B-B'土層断面（第3・4図、写真2）に基づき層序の説明を行う。

- 1 層：造成土である。上面の標高1.6～1.9 m、厚さ30～70 cmである。平成期に造られた本学「助任の丘」の盛土である。
- 2 層：コンクリートである。上面の標高1.3 m、厚さ10 cmである。近・現代に造成されたと考えられる。
- 3-1 層：造成土もしくは攪乱とみられる。上面の標高1.2 m、厚さ40～60 cmである。コンクリート片を多量に含む。近代以降に造成されたと考えられる。
- 3-2 層：造成土もしくは攪乱とみられる。黒褐色2.5Y3/1の粗砂である。上面の標高0.7 m、厚さ20 cmである。近代以降に造成されたと考えられる。
- 4 層：暗灰黄色2.5Y5/2・灰オリーブ色5Y5/3の中砂である。上面の標高0.4～0.5 m、厚さ60 cm以上である。径5 cmの川原石を多量に含む。近世陶磁器を少量含む。近世以降の造成土と考えられる。
- 5 層：黄褐色2.5Y5/3の細砂である。径10 cmのブロック（灰色7.5Y6/1の細砂）を少量含む。やや締まる。近世陶器を少量含む。

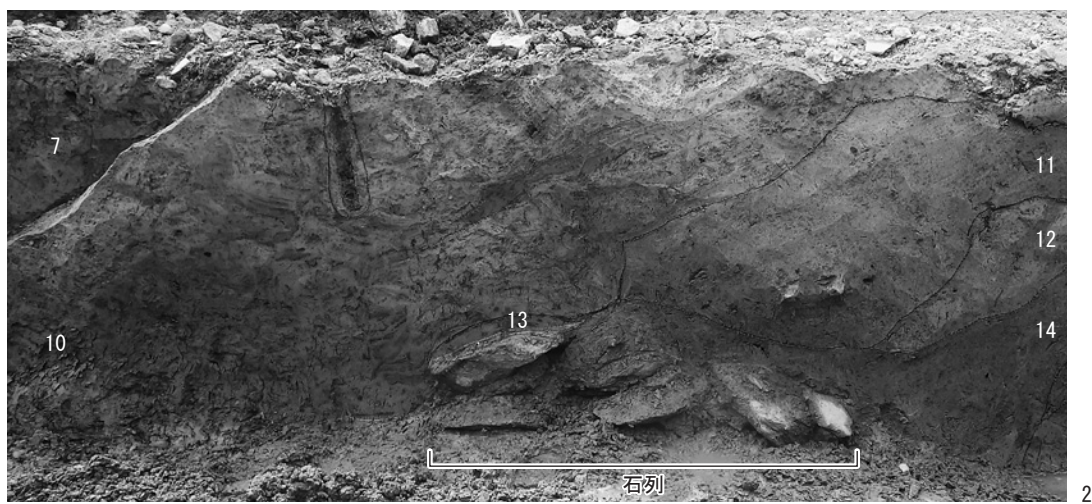
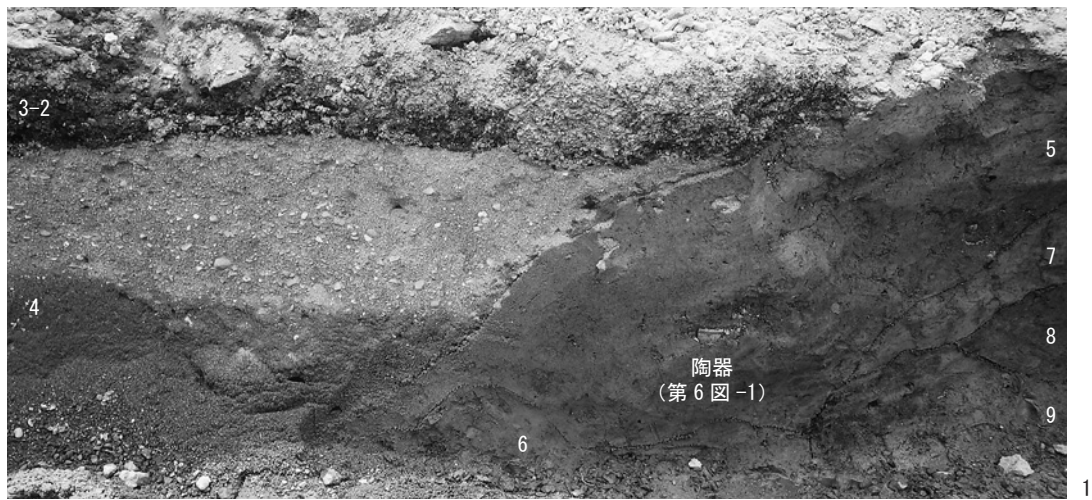


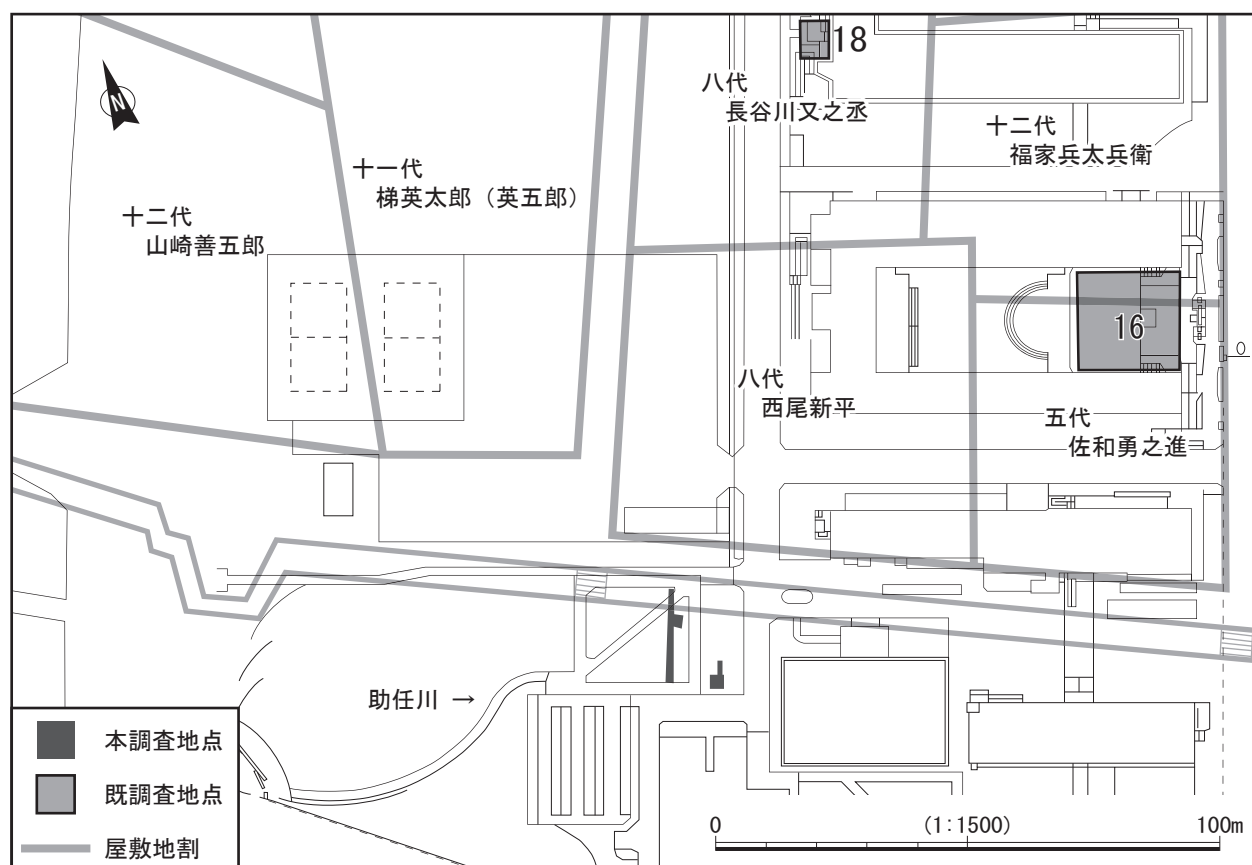
写真2 B区西壁B-B' 土層断面

- 6 層：灰色 N6/0 のシルト質細砂である。
- 7 層：灰色 5Y6/1 の細砂質シルトである。径 10cm のブロック（灰黄色 2.5Y6/2、細砂）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 8 層：暗灰黄色 2.5Y5/2 の中砂である。
- 9 層：灰色 5Y5/1 の細砂である。径 5cm のブロック（灰色 7.5Y6/1、細砂）を少量含む。
- 10 層：明オリーブ灰色 2.5GY7/1 の細砂質シルトである。径 10cm のブロック（灰黄色 2.5Y6/2、細砂）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 11 層：にぶい黄色 2.5Y6/3 のシルト質細砂である。径 5cm の礫を少量含む。やや締まる。瓦片を含む。
- 12 層：浅黄色 2.5Y7/3 の細砂質シルトである。径 10cm のブロック（灰白色 7.5Y7/1、シルト）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 13 層：灰白色 10Y7/1 の細砂質シルトである。
- 14 層：にぶい黄橙色 10YR6/3 のシルト質細砂である。やや締まる。塩基性片岩による石列を伴う。
- 15 層：にぶい黄色 2.5Y6/3 のシルト質細砂である。径 3cm の礫を含む。径 5cm のブロック（灰白色 7.5Y7/1、シルト）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 16 層：灰黄色 2.5Y6/2 の細砂である。径 3cm のブロック（灰白色 5Y7/1、シルト）を極少量含む。やや締まる。
- 17 層：にぶい黄色 2.5Y6/3 の細砂質シルトである。炭化物を少量含む。やや締まる。
- 18 層：灰色 7.5Y6/1 のシルト質細砂である。径 3cm のブロック（灰白色 7.5Y7/1、シルト）を多量に含む。やや締まる。
- 19 層：灰色 N6/0 の中砂である。地山であろうか。

5～18 層は、斜めに堆積しブロックが多く含まれる層を伴う点から、盛土と推定される。B 区北半において 3・4 層を除去した面から検出され、検出面の標高は -0.2～0.8 m である。規模は現状で南北 7.8 m 以上、厚さ 1.0 m 以上が確認される。なお、調査範囲が狭く断定はできないが、19 層は地山の可能性がある。

これらの層の堆積状況をみると、大きく 2 つの層に分けられる。5・11・14・16・17 層は黄褐色の細砂層であるのに対し、7・10・12・15・18 層は黄褐色の砂層と灰色のシルト層がブロック状に混ざっている状態である。そして、両者がおおよそ交互に堆積している状況が観察された（第 4 図、写真 2）。また、14 層には最大長 30～40cm 程度の塩基性片岩によって形成された、幅南北 1.0 m 程度、長さ東西 3.0 m 以上の石列が確認された（第 3 図）。10 層には杭痕がみられるが、本来の掘り込み面と所属時期は不明である。

後述するように、盛土と考えられる 5～18 層から出土した遺物はわずかであるが、18 世紀後半～19 世紀中頃の遺物のみみられ、近・現代のものは含まれないため、盛土の造成時期は近世である可能性が高いといえる。ここで、19 世紀中頃の徳島城下町の様子が描かれた『御山下島分絵図』を現在の地図に重ね合わせたものをみると（第 5 図）、本調査地点は「常三島」地区とその南側を東流する助任川の境界部に位置していることがわかる。



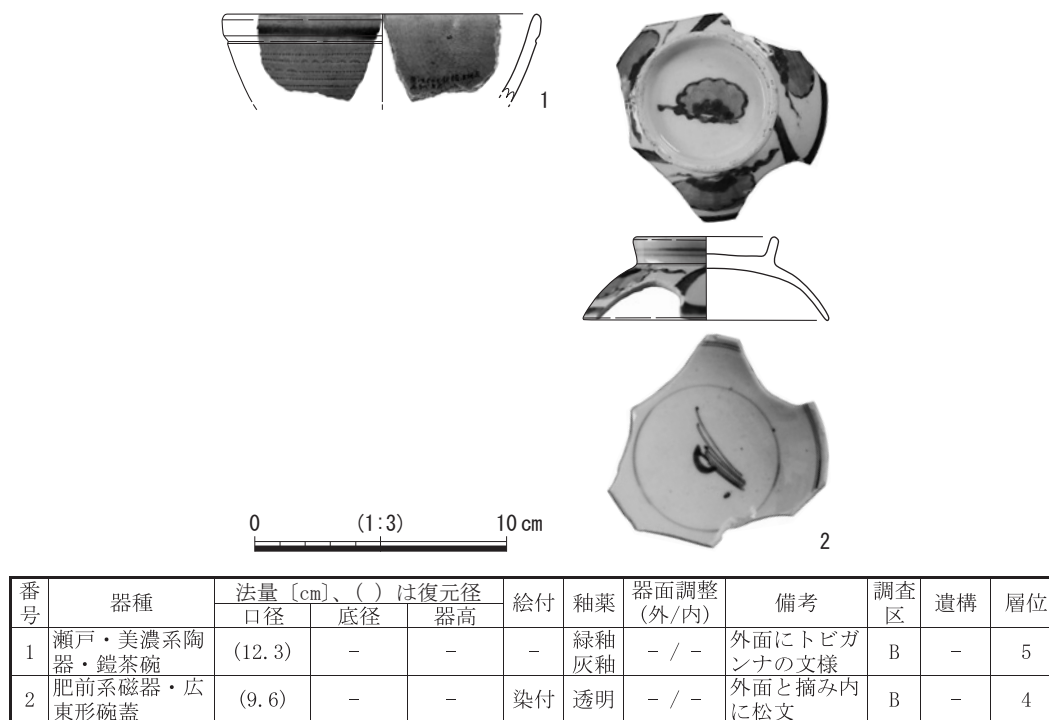
第5図 本調査地点と『御山下島分絵図』(安政年間、個人蔵)との重ね合わせ

上記の点をふまえると、盛土は武家屋敷の建設に際して造成されたものと推定される。石列の性格を特定することはできないが、土層の堆積状況からみて、盛土の土留としての機能が想定される。このほかに、盛土が複数回にわたって造成され、石列が露出していた時期があるとするれば、石列が護岸施設として機能していた可能性もあろうか。また、絵図によると、調査地点のやや西側に、助任川に降りる階段のような表現が認められる。石列が階段の一部であったことも推測されるが、現状では段状を呈しておらず、その可能性は低いといえよう。

2. 遺物 (第4・6図、写真2)

盛土と考えられる5層(第4図、写真2)から、瀬戸・美濃系陶器の鎧茶碗(第6図-1)が出土している。外面にはトビガンナの文様が施される。外面口縁部下の沈線より下には灰釉、沈線の上から内面にかけては緑釉が施されている。沈線部には釉薬はみられない。鎧茶碗は18世紀後半に出現し、19世紀中頃まで存続することが指摘されている(藤澤1998)。同じく盛土とみられる11層から平瓦片が出土しているが時期は不明である。

近世以降の造成土と考えられる4層からは、瀬戸・美濃系磁器碗の蓋(第6図-2)が出土している。形態的にみて広東形碗の蓋と考えられる。外面と摘み内に染付で松文が施されている。見込にも染付



第6図 出土遺物

による文様がみられるが、モチーフは不明である。広東形碗は 1780 ～ 1840 年代に盛行することが指摘されている（大橋 2004）。

3. ま と め

今回の調査では、近世の宅地開発に伴うと考えられる盛土の南端部が検出され、絵図から知られる「常三島」地区の南限が確認されたといえよう。ただし、この盛土が造成された細かな時期や石列の性格については、今後の検討課題となった。

（三阪一徳）

文献

藤澤良祐，1998．近世瀬戸村の窯業生産．瀬戸市史，陶磁史篇 6．瀬戸市史編纂委員会，愛知，pp. 159-185.

端野晋平，2015．発掘調査の概要．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1，121-143.

平井松午・根津寿夫（編），2001．徳島城下とその周辺，絵図図録第 2 集．徳島市立徳島城博物館，徳島．

北條芳隆・定森秀夫（編），2006．常三島遺跡 2：工学部実習棟地点・地域共同センター地点，徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 3 巻．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．

大橋康二，2004．世界をリードした磁器窯：肥前窯．新泉社，東京．

定森秀夫（編），2005．常三島遺跡 1：工学部電気電子棟地点，徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 2 巻．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．